

島 蘭 進（しまぞのすすむ）

1967年、東京大学に入るときは、人助けの学問という気持ちで医学を志しましたが、その理想に疑問をもち、人が幸せに生きようとする意志を吟味する学問の方へ向かいました。ベトナム戦争反対と学園闘争の混乱のなかで、自分も混乱して理科から文科にかわったわけです。それから30年近く、主に日本人の、また現代人の宗教意識の研究をしてきましたが、50歳に近づく頃から新たに死生観や生命倫理の問題に関わるようになりました。宗教について学んできたものとして、現代医学が直面している問題に新たに関わるようになったのは不思議というべきか、必然というべきか。振り出しにもどって初心を問い直す機会を得たこととなります。

1997年、橋本首相が設けた政府の生命倫理委員会の委員となり、以後、クローンやヒト胚研究、ES細胞研究の是非をめぐる討議に加わりました。2011年の東日本大震災の後、宗教者災害支援連絡会の代表として宗教・宗派の枠を超えたケア活動に関わるとともに、原発問題、とりわけ放射線の健康影響問題にも取り組んでいます。科学が自由を奪われ、国家や経済組織の利益に奉仕するようなあり方を超えていくための倫理思想の課題にも取り組んでいます。

本職の宗教学では、近代日本宗教史、現代宗教論、宗教理論を研究してきました。『宗教学の名著30』、『国家神道と日本人』、『現代宗教とスピリチュアリティ』、『From Salvation to Spirituality』、『日本仏教の社会倫理』などの著書があります。

2002年からは東大文学部の死生学のプロジェクトに関わるようになり、『死生学とは何か』（2007年）、『ケア従事者のための死生学』（2010年）を編集。2013年以来、グリーンケアに取り組み、『日本人の死生観を読む』、『ともに悲嘆を生きる』、『グリーンケアの時代』などの書物をまとめてきました。西尾温文先生が骨を折って訳された、ドナ・シャーマン『親と死別した子どもたちへ』（2020年）に「解説」を書いています。

略歴

1948年	東京生まれ
1967年	東京大学教養学部理科3類入学
1972年	東京大学文学部宗教学・宗教史学科卒業
1977年	同大学院博士課程単位取得退学、筑波大学哲学思想学系研究員（文部技官）
1981年	東京外国語大学外国語学部日本語学科助手、専任講師、助教授
1987年	東京大学文学部宗教学・宗教史学科助教授
1994年1月	東京大学文学部宗教学・宗教史学科教授
1995年-2013年	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2013年	東京大学名誉教授
2013年	上智大学神学部特任教授（2016年3月まで）・グリーンケア研究所所長・大正大学客員教授
2015年	上智大学モニュメンタニポニカ所長（兼任）
2016年	上智大学大学院実践宗教学研究科教授・同委員長
2022年	上智大学退職